大立大殿と仲宗根豊見親

ー宮古島主長の継承をめぐってー

下地　和宏（宮古島市史編さん委員）

1．はじめに

14世紀の宮古には2つの大きな出来事があった。1つは14世紀初頭、南中国の温州に漂着した「婆羅公管下の密牙古人」の存在である。[①]『元史』や『温州府志』の記録が発掘されたことで明るみになった。彼らはシンガポールあたりで交易活動していた集団と考えられている。密牙古人は宮古人に、婆羅は保良に比定される。この集団の首長は「婆羅公」と呼ばれる。少なくとも、15世紀末まで「悖羅彌古島」は島民の共通認識であったようだ（『朝鮮王朝実録』）。今1つは、14世紀末に与那覇勢頭豊見親を首長とする集団が中山に朝貢、交通の端緒が開かれたことである。しかも察度王から宮古島の主長に任命され、以後、毎年、中山に朝貢する制度あるいは慣例がつくられたことである。

2つの出来事には言語の問題が介在している。元代の南中国には密牙古人の言語を理解するものがいたこと。一方、琉球・中山とは「重訳」で意を通じ合わなければならなかったこと。重訳とは他の言語を媒介にして意を通じ合えることである。3年の間、琉球語を習得することで意志の疎通ができたこと。この「朝貢」を契機に宮古の軸足は琉球側に移ることになる。「婆羅公」と与那覇勢頭の関係は不明だが、どちらも主長であり同時代に存在していたことは遺跡等の年代から推測される。

15世紀になると宮古島の主長は目黒盛豊見親ー大立大殿ー仲宗根豊見親へと継承されたようだ。目黒盛と与那覇勢頭の前後関係については、疑問が提示されている。[②]この問題は「与那覇原軍（いうさ）」と不可分である。争乱を鎮めた目黒盛が島主に就いたのは中山王の任命ではない。与那覇勢頭、大立大殿、仲宗根豊見親の島主は中山王の任命からすれば大きな違いである。

本稿は宮古島主長の継承を「旧記」や家譜などの資料をもとに、推測をまじえながらその背景をさぐることにある。

2．大立大殿の出自

大立大殿は大里大殿とも表記されるが、本稿では『雍正旧記』（1727年）や『白川氏家譜』（1754年）に基づき大立を使用する。大立大殿は童名を真佐利、諡（おくりな）を恵幹という。父泰川大殿、母久栄免嘉の第3子（3男）として生まれるが、生卒年は不詳である。兄2人は早死にしたという。[③]真佐利の誕生の謂れを『宮古島記事仕次』（1748年。以下「記事仕次」と略す）は次のように伝えている。

大里大殿は始めて中山朝見の道を聞かれし与那覇勢頭豊見親の一子代川大殿ときくひし人の子なりけり。代川大殿は有徳の人なりしを、壮年の比おもはずと伯牛の病を得て代川原に荘園を構へ、隠居して長生を保ちけるとなり。或夜の夢に我屋上に福木生て俄に高数丈の大木

なると見て、自からゆめ合をするに善子を生すへき瑞夢なりしかば、婦人を荘園にまねき会媾して設けたる子なりけり。果たして成人の後は麻姑島の首長となり、大里大殿とあがめられ子孫繁昌きはまりなしと云う。

真佐利は代（泰）川原で隠居生活していた父代（泰）川大殿の瑞夢がきっかけとなり生まれたという。父が壮年の頃思いもかけず患った「伯牛の病」[4]とはハンセン病とされる。宮古島主長に就いた与那覇勢頭豊見親の一家に、一子泰川大殿が伯牛の病で隠居、孫２人が早死するといった不幸が続いたようだ。そのような時に生まれたのが真佐利ではなかったのか。『白川氏家譜正統』は孫の真佐利（大立大殿）を２世とし、祖父豊見親の家統を継がさせたと記している。祖父豊見親は健在で未だ島主の地位にあって、家統の継承は祖父豊見親の意向が反映されたと考えられる。

『新版宮古島庶民史』（稲村賢敷、1972年、以下「庶民史」と略す）は大里大殿の年代考（211頁）で次のように考察している。

大里大殿の成人の頃まで与那覇勢頭豊見親は生存して居られたものと思われる。大里大殿は父泰川大殿の第３子であり、泰川大殿が泰川原に引退してから後に生まれた子であるから、父大殿の35歳以後の生子であろうと思われる。従って、祖父与那覇勢頭豊見親とは55歳以上の年齢の開きがあったものと見なければならぬので、大里大殿が豊見親の家統を継いだ頃を20歳頃としても、豊見親は当時75歳以上になって居られたものと思われる。

「庶民史」の年齢考察は、成人を20歳頃、壮年を35歳頃として進めらている。現代の年齢に比定されているようだ。家統を継ぐためには成人になっているとの前提がうかがえる。果たしてそうであろうか。与那覇勢頭と同時代の目黒盛は二八の頃（16歳）、二八の孟仁似と結婚している（記事仕次）。16歳という年齢は当時の成人であったと考えられる。社団法人日本リサーチ総合研究所の分析によれば、室町時代（1336～1573）の平均寿命は33歳と想定されている。この分析データーからすれば壮年の年齢は「庶民史」より下がるのは当然である。

大立大殿の生年を考えてみよう。手がかりは「白川氏家譜」だけである。大殿は尚円王世代の（1470～76年）の成化年間（1465～87年）に上国した際、高齢を理由に島主の職を辞任し、息子の能知伝盛と執権の空広を交代で上国させたい旨奏請、尚円王から許される。大殿のいう高齢とは「年70余」である。息子の能知伝盛は尚真王世代（1477～1526年）に父大殿に代わり上国する。大殿の上国は尚円王の時が最後であったと考えられる。最後の上国を1476年、70余歳を71～73歳と想定すれば、大立大殿は1404～06年の生まれと考えられる。

『宮古島郷土史考』第３部（砂川明芳、1984年。以下「郷土史考」と略す）は「与那覇原軍」は1408年に起きたと推考している。そして、「軍（いうさ）」は与那覇勢頭豊見親が亡くなった後に起きたと考えている（59～60頁）。祖父豊見親は生まれたばかりの孫真佐利に家統を継がせることを決めていたのであろう。息子の泰川大殿は伯牛の病で泰川原で隠居の身である。祖父豊見親は孫真佐利の成長を見ることなく世を去ったことになる。島尻勝太郎は、与那覇勢頭は与那覇原軍に殺害された[5]、と考えている。

真佐利は誰の下で成長したのだろうか。「与那覇勢頭は、少なくとも目黒盛の勢力と敵対関係ではなかった」（島尻勝太郎）との考察には同意できる。目黒盛は与那覇原軍を鎮め島民から宮古島主長に推される。「根間目黒盛豊見親跡島主　大立大殿童名まさり」（雍正旧記）と伝えられていること、大立大殿が目黒盛の5代孫空広を養育したこと、などを考慮すれば、目黒盛豊見親の下で成長したのではなかろうかと推測される。

〈想定年表〉　　白川氏・忠導氏家譜、記事仕次より作成

国王	（中国）	想定年齢	大立大殿	想定年齢	仲宗根豊見親
尚泰久	1454（景泰5）	50			
		51			
		52			
	1457（天順元）	53	宮古島主長拝命する	1	空広生まれる
		54		2	
		55		3	
		56		4	
尚徳	1461（天順5）	57		5	
		58		6	
	1463（天順7）	59	通尻で“白縄の慰”を行う	7	大立大殿に若蒜を献上する
		60		8	
	1465（成化元）	61		9	
		62		10	
		63		11	
		64		12	
		65		13	
		66		14	
尚円	1470（成化6）	67		15	
		68		16	（長男・金盛生まれる）
	1473（成化9）	69		17	空広・加和良爺、大殿の執権となる
		70		18	（次男・祭金生まれる）
		71		19	
	1476（成化12）	72	大立大殿辞意表明する	20	
尚真	1477（成化13）	能知伝盛上国、久米島で病死する（大立大殿死去する）		21	能知伝盛と交代で上国する
				22	宮古島主長拝命する
				・	
				・	
				・	
				・	
	1488（弘治元）			32	
				33	
	1490（弘治3）			34	祭金の長女・真嘉戸金生まれる
				35	
	1492（弘治5）			36	祭金の長男・玄保生まれる
				37	

3．仲宗根豊見親の出自

『忠導氏家譜正統』によれば仲宗根豊見親は天順年間（1457～64年）、父真誉の子豊見親、母目娥月との間に生まれる。童名は空広、諡（おくりな）は玄雅（忠導氏の元祖）[6]で、嘉靖年間（1522～66年）に死去する。因みに父真誉の子は目黒盛豊見親の曾孫にあたる。「記事仕次」によれば空広は6人兄弟の長兄で2男真濃茶天太は双子の弟、3男は伊寿金中氏、4男伊志津利と5男満喜屋利も双子、6男は知屋盛土賀という。

『宮古史伝』（1927年、以下「史伝」と略す）も「庶民史」も理由は示していないが空広の生年を天順元年（1457）と見ている。〈想定年表〉にあるように、豊見親（空広）の2男祭金の孫、真賀戸金の生年は1490年である。空広の生年を1457年とすれば、33歳の孫である。長男金盛と次男祭金は1～2歳違いと見ても、空広の生年は天順元年である可能性が高い（郷土史考）。そういう意味で本稿では空広の生年は天順元年として扱うことにする。

空広の叔父根間の大親は子孫を設けることなく死去する。叔母は義兄の真誉の子に頼んで甥子の1人を養子に迎えることにした。義兄は「空広と真濃茶天太の2人から選ぶように」と許す。叔母は2人を朝日の影のあたる所に立たせる。空広は痩せて低いが影が高い。真濃茶天太は太って高いが影が短い。それで叔母は空広を養子にしたと伝えられる（記事仕次）。何歳の時養子になったのか伝えられていないが、当時の社会は長男が家統を継承するという社会的システムは未だ成立していなかったと考えられる。「賢慮なる叔母」の下で育てられた空広は7歳の頃から頭角を現したという。

空広が生まれた頃の宮古島主長は与那覇勢頭豊見親の孫大立大殿である。「白川氏家譜」の遺老説[7]によると、与那覇勢頭が最初の島主で、糸数大按司、目黒盛豊見親（根間氏元祖）と続く。その後、長い間何人かの名前も知らない島主がいたようである。詳細なことは伝わっていないが大立大殿から後は事実の記録であるという。「雍正旧記」は不詳の島主をはしょる形で「根間目黒盛豊見親跡島主　大立大殿童名まさり」と報告したのであろう。

その頃の琉球の情勢を概略みることにする。1429年、尚巴志は南山王の他魯毎を滅ぼして三山を統一する。その前の1416年に北山王のはん安知を滅ぼし、1422年中山王に即位している。40年尚忠、45年尚思達、50年尚金福と10年の間に3人の王が父子継承している。尚金福の後継をめぐって、甥（世子）の志魯と叔父の布里が王位を争う「志魯・布里の乱」が1453年に起きる。両人とも死去したため、尚巴志の第5子尚泰久が54年に即位する。4年後の58年に琉球を揺るがす「護佐丸・阿麻和利の乱」が起こる。新興勢力の勝連城主阿麻和利の懐柔策として尚泰久は王女百度踏揚を嫁がせる。中城城には忠臣護佐丸を配置する。阿麻和利は護佐丸の謀反を尚泰久にざん訴、護佐丸を滅ぼす。夫人踏揚と付け人鬼大城は阿麻和利の首里城攻略の計画を知ることで首里城に逃げのびる。阿麻和利は王府軍の鬼大城に討ちとられ落城するという事件である。

この象徴的な事件は尚巴志によって三山統一はなされたものの、必ずしも琉球全体が尚巴志王統（第一尚氏）では安定していなかったことを示している。61年尚徳即位を最後に、70年

の金丸（尚円）クーデターで第一尚氏は崩壊する。以後第二尚氏王統の治政となる。

与那覇勢頭の中山朝貢後の宮古も必ずしも安定した社会であったとは思えない。「与那覇原軍（いうさ）」と呼ばれる戦乱を治めた目黒盛豊見親後は安定的な社会に移行したように見える。与那覇勢頭、および目黒盛の政権から大立大殿が島主に任命されるまでの時代は不鮮明で何も伝えられていない。

4．大立大殿の治政

大立大殿は生没不明だが、70余歳まで宮古島主長の地位にある。当時としてはかなりの長命と思われる。前述したように大殿は1404～06年に生まれたであろうと推測した。大殿は金免嘉（生没不詳）と婚姻するが、義父母の素姓はもとより不明である。子どもが何名いたのかも不明。ただ後継者として能知伝盛が伝えられるだけである。大殿が島主に任じられるまでの経緯も全く不明である。

大殿の没年を考えさせる出来事が「白川氏家譜」および「記事仕次」に描写されている。息子の能知伝盛は隠居した父大殿に代わり上国する。尚真王代のことで即位の1477年と考えられる。能知伝盛は公事を終えての帰途、逆風にあい久米島に漂着する。不幸にして久米島で病死する。父大殿は未だ存命している。「記事仕次」は大殿が亡くなった時、子どもは未だ幼いので世事を治めることは出来ないことから島民は空広を島主にした、と伝える。幼い子どもとは能知伝盛の子、大殿の孫であろうことは予測される。これらの出来事は大殿の没年が尚真王代の早い時期であることを暗示している。

さて、大立大殿は尚泰久（1454～60年）の天順年間（1457～64年）に宮古島主長に任じられたと伝える。〈想定年表〉に示されるように1457～60年の4年の間に尚泰久王から任命されたことになる。本稿ではとりあえず早い時期の1457年を想定しておく。空広の生まれた年で、大殿は50代前半である。大殿が島主の地位に至るまでの背景は全く伝えられていない。大殿は王府に年貢を納めるためにたびたび上国したようだ。ところが古い時代のことなので詳しい事はわからない、という（白川氏家譜）。

大立大殿が島主としてどのような治政をしたのか伝えられていないが、少なくとも20年近く島主の地位にいたと考えられる。大殿の治政の背景をかいま見せる出来事が「記事仕次」に描写されている。少年空広との出会いである。

ある年（1463年頃）の春の晴れた日、大立大殿は赤牛に乗って大勢を引き連れ、通尻という浜辺に”白縄の慰”（網漁の一種）に出かけた。「庶民史」は通尻について「通り」の意で、平良の南にある大嶺の南方にある「通り」の通称「ぴきあそ」のことである（210頁）という。「ぴきあそ」は「ピキャーズ」のこと。「郷土史考」は南長浜（パイナガマ）の南、泰川原の海岸だといわれる（第6部・58頁）と説く。

7歳になった少年空広は”て津やこみや”（あるいは津やこみや）という荘園で奴僕（召使い）を下知することを養母（叔母）から許される。「庶民史」は「てつやくみや」は、市内南

いり里の郊外にある畠地である。かってのぱさま造船所東南の谷間を「ぴっぢゃ底」といい、その北部の畠地を「ぴっぢゃみや」と称している（210頁）と説く。”て津やこみや”は根間の大殿に与えられた領地と考えられる。誰が与えたのか。父普佐盛豊見親（目黒盛豊見親の孫）と考えられる。普佐盛は島主の地位にあったのだろうか。

少年空広は島主大立大殿の一行を望み見て、若蒜（ニンニク）を奴僕にひかせて束ねさせ大殿の行列にひざまずき、

「これは私の作物の初物です。島主に差し上げたい」

大殿は駕（牛）を止めて少年を見ると、その姿や形が非凡で、しかも言語もさはやかにして大人の風情が感じられるので、

「お前はどこの家の誰の子か？」

「私は根間の大親の養子で空広といいます」

「それでは真誉の子の倅だな。誰が蒜を献ずるように教えたのか？」

「今日は養母の命をうけて庄園で下知していると、大殿のお通りがあるのを見て、幸いに私の作物の初物を献ずる事ができました。どうして人の教えを受けることがありましょうか」

「お前の年はいくつか？」

「7歳になります」

大殿は大いに喜んで、私は今日奇童にあったぞと思い、「さあ、お前もいっしょに遊びに行こう」と空広を促した。空広は「私は島主のお供をして通尻に行ったと養母に申し上げよ」と奴僕に伝えて、副馬（そえうま）に乗り一行に従った。

大立大殿と空広の出会いの描写でリアルである。空広が奇童であった故に「白縄の慰」に同行させている。島主大殿の肝の太さをかいま見せる。あるいは真誉の子の倅と知ったことによるか。大殿と真誉の子がどのような関係にあったのか知り得ないが、社会的によく知られていたのだろう。真誉の子はこの頃、健在であったのだろうか。大殿の年齢から推せば真角与那盤ー普佐盛ー真誉の子を知り得たしても不思議ではない。大殿の父泰川大殿はすでに隠居していたので、大殿が島主に任じられるまでの間、目黒盛の系統が宮古の政権を担当していたことも考えられる。

「白縄の慰」に同行した空広はどうなったのか。思いの外大漁だったので、大殿は奇童空広に”魚たま”（人々に魚を配分すること）を命ずる。そのやり方が親疎なくかつ速やかだったので、空広の才智を見込んで自分の下で育てることにした、という。大殿の心の広さを知るエピソードともいえよう。政治的にも安定した社会を見る思いがする。郷土史考も「大立大殿の時代というのは、島内が落着いていた時代と言えるだろう」（第6部、57頁）と見ている。当時の大殿政権下では目黒盛の系統は政権から蚊帳の外であったかも知れない。大殿が目黒盛の5代孫空広を取り立てたことは、くすぶる政権の争奪が背景にあったのではないだろうか。大殿もかっては目黒盛の下で成長した（想定）ことと重ね合わせていたのかも知れない。

5．朝鮮人の漂着と「大津波」

大立大殿が島主として宮古を治めていた1462（天順６）年の２月、朝鮮人８人が宮古島に漂着するという出来事があった。以前にもあったかどうかは不明だが、記録上は初めてである。島民は酒や肉をもって漂着船の朝鮮人に進め、宮古島に留まるように伝える。朝鮮人は宮古島、来間島、伊良部島、下地島、大神島の島民が交互に往来して飲酒していることを見聞している。彼らはその度ごとに朝鮮人を招待して厚くもてなしている（『朝鮮王朝実録』）。島主大殿が彼らを招待したかどうかは想像にまかせるしかない。彼らは２ヶ月余滞在して、琉球国の商船に便乗して琉球国に入った。彼らは7月に朝鮮向け発している。商船とは貢納船のことと思われる。

15年後の1477（成化13）年２月、今度は与那国島に朝鮮人３人が漂着した。琉球では尚真王が即位した年である。3人の朝鮮人は与那国島に半年、西表島の祖内で５ヶ月滞在、波照間島、新城島、黒島、多良間島、伊良部島でそれぞれ1ヶ月ばかり滞在したのち宮古島に護送されてきた。翌78年の４月頃かと考えられる。

この時の宮古島主長は誰だったのか。かなり微妙な時期である。能知伝盛が父大殿に代わり上国したのは、尚真王即位の年であろうと述べた。久米島で病死したのはその年か翌年かもしれない。大殿が尚円王に島主の辞意を伝えたのは76年（成化12）と想定した。大殿・能知伝盛父子が亡くなることで空広は島主として任じられたという。これらの状況から考えても特定することはかなり難しい。

朝鮮人は宮古島でも１ヶ月ばかりの滞在で５月には琉球国に発った。３ヶ月ばかり滞在して薩摩、博多を経て79年５月朝鮮に入った。朝鮮人は他の島々と違う文化を宮古島で感じている。琉球国と貿易しているからだという。

宮古の「旧記」類には大津波の伝説が5話収録されている。①嶺間御嶽（御嶽由来記）②上平屋御嶽（雍正旧記）・砂川村佐阿称大氏仙女に逢う事（記事仕次）③伊良部下地という村洪濤にひかれし事（記事仕次）④久場嘉按司の女子普門好善の事（記事仕次）⑤多良間島立始由来の事（宮古島記事）の５話であるが、②は同じ内容の伝説を2つの旧記に収録したものである。この５編に含まれる伝説の大津波が同時代かどうかは検討をようするが[8]、本稿の目的ではないので省略する。

④の伝説について「庶民史」は『那覇由来記』および『琉球国由来記』に記載された記事に注目する。ろくろの伝来者鮫島太郎兵衛と普門好善の夫琉球人玉城は同一人であると考えるに至り「彼が那覇普門寺に居住し、宮古、八重山諸島にも往来し、宮古女を娶って１人の男子を出生したということについては不思議にその記録が一致してくる」という。普門寺の建立は尚泰久王の景泰年間（1450～56年）であるから、普門好善の大津波伝説は景泰、天順年間（1460年頃）のことであろうと思われる（248頁）と推考している。

③の伝説はいわゆる「よなたま伝説」である。前述した８人の朝鮮人が漂着した記録に「郷土史考」は注目する。漂着した「肖得誠らが見た宮古には伊良部下地村あったとなれば、1462

年は下地村があったということである。だとすれば、大津波があったのは、それ以後ということになる」（第4部、89頁）と推考する。そして「結局1470年頃に、その大津波はあったのだろう」（90頁）と大津波の年代を想定している。

両著は伝説の大津波の年代を1460～70年頃と考えている。大津波は宮古島の南岸および下地島を集中的に襲っていることがわかる。伝説を読む限りにおいて、島主大殿が居住する地（現平良下里西部地区）は被害を蒙ったとは思われない。大津波が宮古に与えた影響は大きかったのであろう。友利村や砂川村は再興されているが、下地村および久場嘉城のあった嘉手苅村は再興されていない。

大津波が起こったとされる時代は、空広が島主大立大殿の下で養育されている時期である。島主大殿は大津波の災害にどのように対応したのであろうか。記録は何も伝えていない。

大津波の時期について地質学の視点から興味深い研究がある。加藤祐三、田村一浩による下地島北岸佐和田の津波石の調査研究である[9]。佐和田港並びに佐和田干出帯（干潟）に点在する325個の岩塊のうち津波石は26個であると。ノッチの形成状態を分析した結果、明和の大津波（1771年）以前の津波石があることを確認し、過去に2回以上の大津波があったことを推測している。1回目は400～500年以前、2回目は800～1000年以前であると。1回目の大津波が「庶民史」および「郷土史考」の推考した年代とほぼ一致する。伝説の大津波が地質学の側面からも裏付けられたことになる。

島主大殿は大津波後の不安な社会を立て直すために力を注いだのではないだろうか。そのために二人の執権を任命したのではと考える。一人は加和良保爺、この人の経歴は全く不明である。もう一人は空広である。抜擢された空広17歳の年が1473年頃であることを考え合わせると想像をかきたてさせる。

6．空広、大立大殿の執権となる

遺老の説による宮古島主長は与那覇勢頭豊見親、糸数大按司、目黒盛豊見親と続き、氏名不詳の者を経て、大立大殿へと続くことは前に述べた通りである。この説に依拠すれば「一郡の主」と島主は同意かと思われる。糸数大按司が一郡の主と地位に居た頃、目黒盛は未だ少年である。目黒盛は「与那覇原軍」を鎮め島民から島主に推戴されたのであって、中山王による任命ではないという。

その頃の中山は察度－武寧と続いた政権が尚巴志によって滅ぼされ、父尚思紹を王位に就け新政権が樹立されている（1406年）。この政権を第一尚氏という。尚巴志は1416年北山王はん安知を滅ぼし、22年中山王に即位する。29年には南山王他魯毎を滅ぼし三山を統一する。

中山が政治的に不安定な頃、宮古も「与那覇原軍」で不安定な社会であったと思われる。そのような事情が中山および宮古にあった。目黒盛の島主は中山王による任命でないとすれば、その頃の宮古と中山の交通は途絶えていたことも考えられる。お互いの内政事情が反映しているのだろうと憶測する。与那覇勢頭の中山朝貢以来「毎年ノ朝貢ニハ定リヌ」（中山世鑑）と

言うぐらいだから、中山への朝貢は制度化されたものであろう。この制度が実施されなかった時代があったやも知れない。

与那覇勢頭の孫大立大殿が島主になるまでの間、およそ60余年間、中山との交通は霧の中である。目黒盛豊見親を元祖とする『根馬氏家譜正統』にもこの空白期間については何も記されていない。また、目黒盛の後、氏名不詳の島主がいたことを伝えるだけだから、政治的、社会的には影の薄い、あるいは短命の島主であったのかも知れない。島主を体験した人も今はこの世になく、大立大殿の時代になった。かつての島主目黒盛の五代孫空広は大立大殿に取り入れられる。目黒盛系統の政権奪還への道筋のようにも見える。

島主大殿の下で養育された少年空広も17歳になった。〈想定年表〉では野崎村の安嘉宇立親の娘宇津免嘉と結婚し、長男金盛を設けていた頃と考える。その頃、空広は加和良保爺とともに大殿の執権として政務に携わることになる。大津波の恐怖が今だに語られる1473年頃である。空広を執権として処遇した大殿は息子能知伝盛はどのように処遇したのか。気になるところであるが、何も記録されていない。

「記事仕次」は加和良保爺の人物像について「邪佞の人にてやゝもすれば良人をざん言して害せんとたくむ」者であるという。不正な心をもち人にへつらう加和良保爺を執権とした島主大殿は人を見る目がなかったといえなくもない。しかし、空広の非凡な才能を見抜いて養育しているのではないか。空広と加和良保爺を比較することで空広の行為を際立たせるための一方的な描写であろう。

空広は加和良保爺のざん言にあった者たちに義理をもって諭し、その実否を明らかにしたので罪を逃れた者も多かった、という。当時は慣習として「諸味こうじ」を島主に献上して貢物にしていたようだ。その諸味こうじを島内各地から島主の館（役所）に運び込む人が多かった。それでその日のうちに納めきれない人々は門外で一夜あるいは二夜をすごさざるを得なかった。また、「移り壷」を取りに行くと残っていた中味をこぼして返していた。それでその捨て場は小麦の粉で堆たかく、神酒は川のように流れていた、という。

空広が執権を担うようになってから、このような無駄および時間の浪費は改善された。空広は移り壷を取りに来る人々にその残り分を分け与えて、「遠方から来るお前たちを憐れみ、これは島主より賜うものであるぞ」と巧みに言い聞かせて帰した。役人らしい恩着せがましい態度である。空広の本音の一端を垣間みせる描写である。空広は総ての事に慈悲をもって島民を憐れんだので、島民は父母を慕うような空広を尊んだ、ともいう。

空広は大立大殿政権の中枢を担うことで「空広派」とでもいいそうな政権内グループが形成されたのではないだろうか。慈悲の心で島民に接したのは空広に限られたことではないだろうに。空広を際立される描写の背景をこのように理解する。うがちすぎであろうか。島主への道のお膳立ては執権時代に準備されたのであろう。

7．能知伝盛、久米島で病死

前述したように島主大立大殿は70余歳という高齢を理由に島主職を辞任したい旨を尚円王（1470～76年）に奏請する。私の代役として愚子能知伝盛と執権空広を交互に入貢上国させたいと願い出る。大殿の請願は許され安心して帰島する。成化年間（1465～87年）の出来事である。年代幅を考察してみよう。空広は17歳で執権に就いたと伝えるので、大殿の奏請は1473年以後のことである。とすれば1474～76年の3年間にあった動向として見ることが出来る。本稿ではこの奏請許可の年を尚円王の没年、1476年と想定する。

大殿の息子能知伝盛は尚真王（1477～1526年）の成化年間、父大殿に代り名代として入貢している。父大殿は健在であり未だ島主の地位にあったと思われる。能知伝盛の入貢の年を考察してみよう。

第二尚氏王統の初代尚円王が没したのは1476年7月である。世子の尚真は未だ幼いとの理由から、弟の尚宣威が二代目の王位に就く。ところが半年後、世子の尚真を君とする託宣があったとして、13歳の尚真が三代目の王位に就いた。1477年2月のことである。

能知伝盛の上国は尚真王の即位祝賀とも考えられる。島主の名代としての初任務であったのであろう。父大殿の「後継者」として。このように想定してみると、能知伝盛の上国は尚真王元年の1477年である可能性が高いと思われる。父大殿は宮古島主長に尚泰久王から任命されて以来、尚徳王、尚円王の三名に仕えている。能知伝盛は新しい時代の尚真王に仕えることになるはずであった。

「庶民史」は「暫くして大里大殿の死後恵照（能知伝盛）は父の家統を継いで宮古主長になったけれども、中山朝貢の帰途逆風に遭うて久米島に漂着し、間もなく病没したので久米島東御に葬った（白川氏家譜）」（211頁）と述べているが「白川氏家譜」には、

尚真王世代

成化年間、當父恵幹上国之期、因老而辞。恵照代父棒貢、公事既竣回悼之時、陡逢逆風飄到久米島。奈恵照又得病故葬千彼島東嶽

と記されている。父大殿が亡くなったとも、能知伝盛が島主なったとも読みきれない。前述したように、むしろ父大殿は今尚健在であり、能知伝盛は父の名代として上国したのだと考えるべきであろう。

久米島に漂着した能知伝盛は「得病故葬」られた。どのような病気であったのだろう。上国した時の健康はどうであったのだろう。漂着した時はどうであったのだろう。当時は故郷に連れ帰らずその地で埋葬する慣習でもあったのだろうか。うがった見方をすれば能知伝盛はあまりにも都合よく亡くなっている。果たして「病死」なのだろうか。島主大殿の後継者をめぐる対立はなかったのであろうか。

大立大殿の政権内部で何かが起きた。政権中枢の一翼を担う加和良保爺はどうなったのか。二つの事が考えられる。一つは「佞人」とされ失脚した、今一つは亡くなった、かであろう。3、4年後内の出来事であろう。推測の域を出ないが、大殿の息子能知伝盛を中心とする「正

統派」、目黒盛系統の執権空広を中心とする「復権派」とでもいうような派閥が形成されていたのではないかと。

目黒盛豊見親の亡き後、氏名不詳の島主が続いたと伝えるが、大立大殿は不詳の島主の政権内で重要な役割りを担っていたのではなかろうか。それ故に島主に任命されたのではなかろうか。中山の力を背景にした与那覇勢頭以来の政権の奪還と見えなくもない。しかし、大殿は能知伝盛と空広を名代として交互に上国させたいとの思いがあったことから考えて、後継者の島主を決めてなかったのかも知れない。息子能知伝盛のおもいがけない病死は大殿にとっては想定外であったと思われる。

8．仲宗根豊見親、島主となる

「忠導氏家譜」は、尚円王の成化年間、空広は中山に入貢、朝見して命を奉じ宮古島の主長になるという古伝がある、と記している。この記事を「白川氏家譜」および「記事仕次」と照合してみると誤伝である可能性が少なくない。これまで述べてきた通り、空広が尚円王から島主に任命されたとするには筋が通らない。むしろ島主大殿から執権に任命されたことが島主として誤伝されたことによる「古伝」ではなかろうか。空広は執権として非凡な才能を発揮して多くの人々の支持を得たといわれる。

「記事仕次」は島主大立大殿が亡くなった時、(能知伝盛の子は) 未だ幼く世事を治める事ができないので、諸人は空広を尊んで仲宗根豊見親と称して島主にした、と伝える。この伝聞記録は、息子能知伝盛、つづいて父大里大殿が亡くなったことで、島民が空広を島主の座に押し上げたとする。注意すべきは「大里大殿率去する時子共いまだ幼稚なれば」と伝えていることである。この幼い子を大立大殿の子と見るには年齢的に無理がある。能知伝盛の子、大殿の孫と見るのが妥当であろう。この伝承は能知伝盛が亡き後も父大殿は健在であったことを示唆している。

『雍正旧記』はこの件について微妙な異なる報告をしている。[10]

大殿は老衰に及び候に付、男子ぬちでもいと空広両人へ申し付、当島を下知させ候処、大殿の死後にぬちでもい上国致し、帰帆の砌久米島へ漂着し、病死仕り候に付、首里の御諚を蒙り、大殿の跡職は空広が頂戴仕り、御目見えの為上国致し候間、金銀の御簪を頂戴仕り罷り下り申候。

能知伝盛が上国したのは父大殿が亡くなった後であり、父の名代として上国した訳ではない。能知伝盛も病死したので、島主の地位は空広にころがりこんだ。それで尚真王に拝謁のため上国、金頭銀茎の簪を拝受して帰島した、という。

能知伝盛の上国が父大殿の死後か、父大殿の名代かの相違は当時の調査者および被調査者の違いによるものかも知れない。『雍正旧記』は1727年、『記事仕次』は1748年、『白川氏家譜』は1754年に出来る。この違いは『雍正旧記』後の再調査で修正されたと見るべきであろう。1476年から78あるいは79年までの出来事は次のように見ることができる。

①島主大立大殿、尚円王に奏請する。②能知伝盛、島主大殿の名代として上国する。③能知伝盛病死する。④島主大殿死去する。⑤空広、尚真王より島主を拝命する。

「庶民史」は「忠導氏家譜によれば、豊見親は天順年間の誕生であって嘉靖の初頃（1525年頃）に率すとあるから、成化年間の末（1485年頃）に彼が宮古主長に任命された時には齢30歳未満の弱輩であったとみなければならぬ」（212頁）と考察している。30歳未満を弱輩とみるかどうかは一考を要する。〈想定年表〉にあるように豊見親が宮古島主長に就いたのは22歳あるいは23歳、1478～79年と考えられる。「庶民史」の1485年は何に基づいているのか不明である。

大立大殿の政権内に「能知伝盛派」と「空広派」が対峙していたのではないかと憶測したが、よけいなことかも知れない。しかし、心に刺のようにひっかかるのは、能知伝盛の久米島での「病死」である。あまりにもドラマ的すぎる。偶然でしょう、といえばそうであろう。その後の婚姻関係に目を転じてみよう。

仲宗根豊見親には金盛、祭金、知利真良、馬之子の男子四人、真保那利、仁娥姐盛の娘二人が知られている。豊見親が島主に推された時にいた「未だ幼い子」が後の四世下里与人恵山（童名真佐久）と考えられる。豊見親は真保那利を恵山に娶せ、故能知伝盛と姻戚関係をもつことになる。うがちすぎるきらいもあるが、島主交代（政権奪還）の波風を鎮めるための、いわゆる政略結婚ではなかったかと思われる。

ともあれ宮古島主長に任命された豊見親は尚真王の絶対的な権力に服従を強いられることとなる。尚真王は「アカハチ事件」（1500年）の際の忠誠を重んじ、獅子の意匠をもつ金頭銀茎の簪を授与する。豊見親は宝剣治金丸および宝玉（真珠）を献上してゆるぎない忠臣の証しをたてる。豊見親は初めて、「宮古頭職」に任じられる。1500（弘治13）年であろう。『雍正旧記』に収録された「弘治年間の頃同人島の主成候付あやご[11]」はこの宮古頭職の就任を祝い島民が歌いあげた“即興歌”と考えられる。

9．おわりに

14世紀から15世紀にかけての宮古史は曖昧模糊としている。「婆羅公」の存在、経歴不明の与那覇勢頭の抬頭、正体不明な「与那覇原軍（いうさ）」、目黒盛と与那覇勢頭の前後関係、「旧記」の世界など。本稿では宮古島の主長の変遷を「郷土史考」の提起に沿って進めてきた。本稿を起こすにあたっての 切っ掛けは、大立大殿の息子能知伝盛が久米島で「病没」したことにある。ふっきれないまま箪笥の奥にしまいこんだままであった。

「郷土史考」が提起する「与那覇勢頭の中山朝貢から数えて10年にして勢頭は没し、そこで争乱の世となり、目黒盛が天下をとって再び中山との結びを回復」（第三部、59頁）したとの推考に触発されたものである。宮古島の主長には与那覇勢頭頭系と目黒盛系が交互に就いている。氏名不詳の島主がいたことも伝えているが、大きな流れは二つの系統として考えられる。

与那覇勢頭が亡くなった後に起きたと考える「争乱」の社会を経て、孫の大立大殿の時代は

安定した社会と考えられている。そこに突如として大津波が襲いかかったことになる。「白川氏家譜」だけに依拠するのは心もとないが、島主大殿は後継者として息子能知伝盛と執権空広のどちらかを選択したいと考えていた節がある。しかし、思いがけない息子の「病死」に直面し、どのように変化したのか。

「旧記」や家譜などを基に島主の変遷を推考してみたが、憶測のそしりは免れ得ない。それでも政権交代の背景を探ることは徒労とは考えていない。残された資料を吟味して曖昧模糊の世界に少しでも近づくことができればと思う。「病没」して久米島に葬られ故郷にもどることのなかった故人のためにも。

〈注〉

①藤田豊八「琉求人南洋通商の最古の記録」(『史学雑誌』第28編第8号、大正6年8月)

②砂川明芳『宮古島郷土史考』第三部（1984年）の第37節年代考（57～58頁）

③（白川氏①）与那覇勢頭豊見親 ── 泰川大殿 ┬ 早世
　‖ 久栄免嘉　　‖ 久栄免嘉
　├ 早世
　└ ②大立大殿 ── 能知伝盛
　　‖ 金免嘉

④伯牛の疾　立派な人が悪い病にかかるのをいう。伯牛は孔子の弟子。癩病で死んだという(『大漢和辞典』巻一、大修館書店、昭和30年)

⑤『与那覇勢頭豊見親逗留旧跡碑復元記念集』(1989年）57頁

⑥（根馬氏①）目黒盛豊見親 ── ②真角与那盤殿 ┬ 普佐盛 ┬ 真誉の子 ── （忠導氏①）仲宗根豊見親
　‖ 孟仁似
　├ 普佐盛 ┬ 真誉の子（‖ 目娥月）
　│　　　 └ 根間の大親
　└ ③根間の伊嘉利 ── ④桃多良
仲宗根豊見親（‖ 宇津免嘉）
　├ 中屋豊見親金盛（玄武）不届に付家統継がず
　├ ②八重山豊見親祭金（玄数）
　├ （宮金氏①）知利真良豊見親（寛忠）
　└ 馬之子（平良親雲上玄屯）

⑦遺老　①先代からの旧臣。②滅ぼされた国の老臣で、新しい朝廷に仕えない者、③長く生き残って世間のことをよく知っている老人。の意がある。(『大字源』角川書店、1992年)

⑧拙著「あまれ村と伝説の津波について」(『宮古島市総合博物館紀要』第11号、2007年)

⑨加藤祐三・田村一浩「沖縄県下地島北岸佐和田の津波石」(『月間海洋』2002年)

⑩『球陽』(1743～45年）に「大殿已に老衰に及び、男、後手盛及び空広をして宮古の政事

を摂治せしむ。大殿病率するに至り、後手盛、父の家統を継ぎ、陞りて島主と為る」と記述される（『沖縄文化史料集成5、球陽、読み下し編」129頁）。この項は『雍正旧記』（1727年）の「大殿死後にぬちでもい上国致し』が反映されていると考えられる。

⑪弘治年間の頃、仲宗根豊見親島の主成候付あやご

1	空広か　豊見親の　あやことそ まなふ当称広と豊ま（以下略）	1	空広の　豊見親の　アヤゴをばしよう まこと名だたる空広の豊見親（はやし）
2	おきなから　美御前から　美御声	2	沖縄から　国王からの　お声掛りで
3	しまた免る　国た免る　たやまひは	3	島を鎮めよ　国を鎮めよ　とあれば
4	あか親　むまよのむ　談合す	4	わが親　阿母とも　談合して
5	称間真中　外間真中ん	5	根間の真中　外間の真中に
6	平良皆　お屋ミそね　おこない	6	平良の皆　御宗根〈部落〉を集めて
7	白か川の　湧とゝか　かけ水	7	白明井の　湧出ずる　清水を
8	ちきや水　すつか水　呑ます	8	湧き続く水　静かな水を　飲ますよ
9	城しま　おワら島　へれめやい	9	城島へ　上手の村へ　お出でになって
10	友利大殿と　砂川大殿と	10	友利大殿と　砂川大殿と（談合して）
11	城皆　おワら皆　おこない	11	城の人皆　上手の皆を　集めて
12	へたら川の　湧とゝか　かけ水	12	ベトラ川の　湧出ずる　清水を
13	ちきやい水　すつか水　呑す	13	湧き続く泉　静かな水を　飲ますよ
14	大下地　大田の上　へやれめやい	14	大下地へ　大田の上へ　お出でになって
15	川満のとのと　まなふかりとのと	15	川満の殿と　真直金殿と（談合して）
16	下地皆　田の上皆　おこない	16	下地の人皆　田の上の人皆を　集めて
17	へふつ川の　湧とゝか　かけ水	17	ベウツ川の　湧出ずる　清水を
18	ちきやい水　すつか水　呑ます	18	湧き続く泉　静かな水を　飲ますよ
19	しま鎮　国豊たら	19	島〈村〉は鎮まり　国は鳴響むだろう
	原文「雍正旧記」		訳文「宮古史伝」